

みんなで声を合わせて ～群読を楽しもう～

仁愛女子短期大学 准教授 前田 敬子

◆講座要項掲載内容◆

折しも季節は秋。秋と言えば、誰もが詩人に…。詩を作るのではなく、楽しい詩を音符無し合唱のように声を合わせて読む「実習系」を想定しています。何人かで「追いかけ読み」「乱れ読み」「バックグラウンド」など。「あら、まあ。子どもたちにもできそう、発表会や劇遊びに応用できるかしら」と皆さんの中でどんどん発展していくならば、より素敵な時間となります。

◆開催期日◆

平成22年10月2日（土）13：30～15：00



◆開催内容◆

1. 群読とは何か

何人かで分けて読むことを「群読」と呼びます。声を合わせる楽しさ、声の重なりを聴くときの思わぬ魅力から、主に小中学校の現場で実践されている。幼児教育現場ではどのように活かせるか、何がしかのヒントになればと願っている。「日本群読教育の会」のテキスト類もあるが、群読技法を私なりに大まかにまとめてみた。

(1) 役割読み もっとも単純なのは「2人読み」、この応用で劇に発展させることが可能。劇の脚本集の1つの役から逆に複数に分けることもできる。歌のデュエットと似ている。

(2) 人数（声）の増減 声を出す人数を次第に増やしたり減らしたりすることによって楽譜で言うクレシェン

ド・デクレシェンドを表現できる。一人ひとりが読みながら声の大きさを調整することもある。

(3) 始まりをずらす 先に読んだ人を追いかけるように、わざとずらして読む。「乱れ読み」もこの変形。

(4) ソロ・アンサンブル・コーラスのパートに分かれて読む。聴く人を最も驚かせるのはこの技法だが、事前の脚本作りが必要である上に、幼児には困難かもしれない。

2. 実践

○川崎洋「書く」を例に

詩「書く」川崎洋

- ①あたまをかくのは ほくのくせ
- ②わきばらかくのは チンパンジー
- ③いびきをかくのは とうさんで
- …（中略）
- ⑨しかられべそかく いたずらっこ

(1) 1人と全員

題と作者名は全員読み、詩は1人1行ずつ、詩の各連の最後の行を全員で読む。

右の詩で言えば、①の行を子どもa1人が「あたまをかくのはほくのくせ」と読んだら、別の1人bが②行目「わきばらかくのはチンパンジー」と読み、また別の1人cが③行目「いびきをかくのは…」と読み、以下同様に続け、最後の9行目を全員で読む。

(2) 「問い」と「答え」の2人読み

上記の詩を例にすると、①の行をa b 2人で分ける。「あたまを書くのは」と1人aが言い、別の1人bが「ほくのくせ」と読む。②の行はc d 2人で「わきばらかくのは」と「チンパンジー」を分ける。以下、同様。

以上(1)(2)の読み方を、舞台など会場での人員a b c d f g hの立ち位置とともに示したのが図1、図2である。以下、舞台の図はいずれも下を観客席に見立て

た。一人ひとりが短い台詞として覚え振り付きにする。教諭・保育士はピアノ伴奏で味付けをするとともに、台詞と動きのタイミングを示せば、発表会に応用できるのではないか。

○ 島田陽子「へんなまち」を例に

(3) 2人読み(交誦)

2人の交互読みを基本とする。1行目①をaが読んだら、2行目②はbが読む。そして3行目③はa b 2人で声を合わせて読む。以下、④をc、⑤をd、⑥をc dと人員を変える。

(4) 人を増やしていく漸増法

①をa 1人が、②をa b 2人が、③をa b c 3人が読む。以下、④～⑥はd e fの3人が担当、⑦～⑨はg h iの3人が担当して、それぞれ1行目が1人、2行目2人、3行目は3人と増やしていく。

更に、④を4名、⑤5名、⑥6名が、⑦7名、⑧8名、⑨9名と増やしていけば、声も大きくなり醍醐味があるかもしれない。

○ 小野ルミ「こんにゃく」を例に

(5) 追いかけて読み(わざと始まりをずらして読む)

図3のように、a 1人が「とんぷるぷるぷるよ」と言い始めるが、bはaの「とんぷ」が聞こえたあたりで始まりの「と」を発声し「とんぷるぷるぷるよ」と続ける。同様にbの「とんぷ」が聞こえたらcは始まりの「と」を発声して続ける。a b c 3人は①の終わりもずれる。2行目②の読み始めは、先のcが終わったタイミングで「ぷ」を読み始める。(先と同じaが始めてもよいが、別の人員が始めるとするなら) dが「ぷるぷ」と言ったらeが始まりの「ぷ」を発声、eが「ぷるぷ」と言ったら、fは「ぷ」を発声して続けていく。

3行目③、4行目④は、詩のアクセントになる部分なので、別の人員が当たる。以下、⑤のように「ぷるぷる」が入る行は3人が始まりをずらして読み、他の行はずらずに読むことで、詩全体が変化に富み、声の重なる部分は、あたかも鈴虫の音色のように美しい響きになる。

図1 1人読みと全員読みの舞台

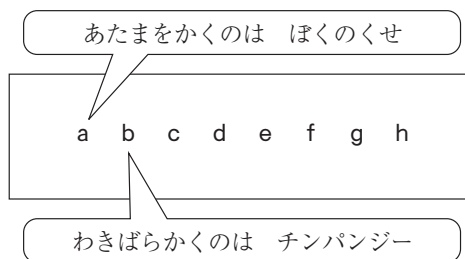
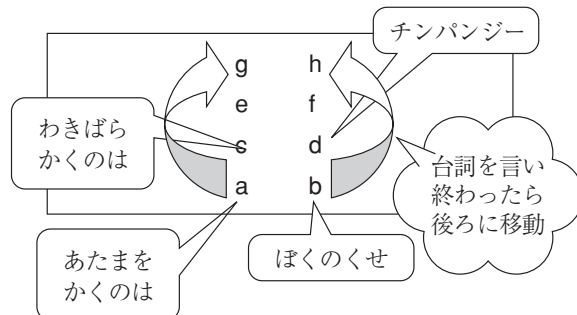


図2 「問い」と「答え」の2人読みの舞台



へんなまち 島田陽子

① きやはる しやはる いいやはる
② よびはる まちはる あるきはる
③ はるはる おおさか はるのまち

④ よめはん むこはん あかあはん
⑤ おまはん おばはん たなかはん
⑥ はんはん おおさか はんがすき

⑦ おまへん でけへん すんまへん
⑧ かめへん せかへん こまらへん
⑨ へんへん おおさか へんなまち

こんにゃく 小野ルミ

① とんぷるぷるぷるよ
② ぷるぷるぷるるよ
③ とんぷ
④ とんぷる
⑤ とんぷるぷるよ
⑥ とんとん
⑦ ぷるぷるぷる ぷるるよ
⑧ まないたの上
⑨ こんにゃく 切っちゃった
(後略)

図3 始まりをずらして読む

a とんぷるぷるぷるよ
b とんぷるぷるぷるよ
c とんぷるぷるぷるよ

○与田準一「ことばのけいこ」を例に

(6) 全体と2人(「誦導」と2人読み)

「誦導」とは、学校で教師がはじめに手本を読み、児童・生徒が後をついて読むような手法である。これと2人読みを連動させ、更に即興のピアノ伴奏、あるいはカステネットを入れると、より楽しくなるのではないか。

「ことばのけいこ」の例では、①②を全員で言い、③「かえるが」をa 1人、「かえると」をb 1人が言い、同様に④「ことばの」をa、「けいこ」をb、a b 2人が⑤⑥「けっくう けっくう きゃ きゅ きょ」を声を合わせて言う。その後「せっすう せっすう しゃ しゅ しょ」「にえおう にえおう にゃ にゅ にょ」などは、別の2人組にスポットが当たるようにする。(講座では言及しなかったが、一連は「かえる」のように、二連は「れっしゃ」のように、三連は「こねこ」などになり切って発声する遊びへの発展も考えられる。)

ことばのけいこ 与田準一

- ① けっくう けっくう
- ② きゃ きゅ きょ
- ③ かえるが かえると
- ④ ことばの けいこ
- ⑤ けっくう けっくう
- ⑥ きゃ きゅ きょ
(後略)



市販の脚本

- (赤ずきん) ① 早くおばあちゃんのところに行かなくちゃ
(オオカミ) ② 赤ずきんちゃん急いで歩いてどちらまで?
(赤ずきん) ③ ご病気のおばあちゃんのところにお見舞いに行くの
(オオカミ) ④ 赤ずきんちゃん赤ずきんちゃん
(赤ずきん) ⑤ なあに?オオカミさん
(オオカミ) ⑥ お見舞いに行くのならお花があったほうがおばあちゃん喜ぶよ。
⑦ たとえばこんなお花がいいよ。
(赤ずきん) ⑧ そうかしら?

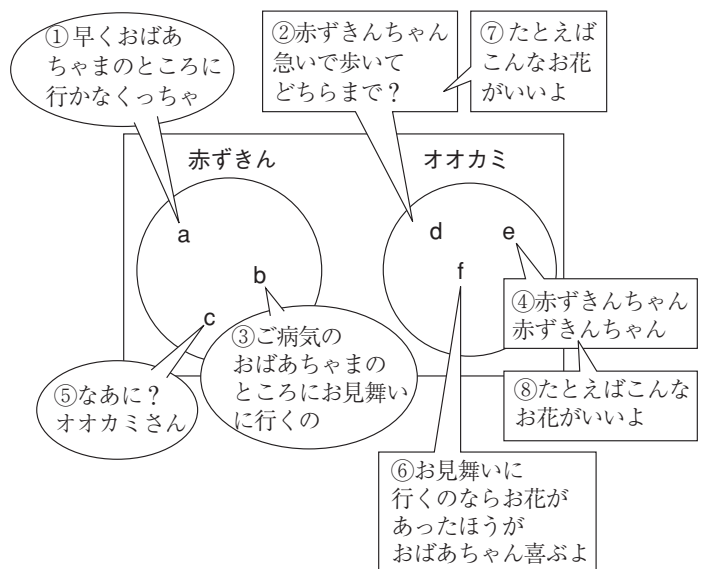
○「赤ずきん」の脚本をもとに

劇の脚本が子どもの人数と合わない、多くの子どもに台詞を与えたいというときに、一つの台詞を分ける、一つの役を何人かで演じる。異年齢の場合、例えば短い台詞を年少に、長めの台詞を年長に当てる(しかも一緒に舞台上上がる)という構図でもよいと思う。

図4のように、赤ずきんをa b c 3人、オオカミをd e f 3人に割り当てる。

基本的に発声の順番は、アルファベット順にしておく(子どもには「〇〇ちゃんの後はいつも△△ちゃんね」と伝えておく)。「たとえばこんなお花がいいよ」「そうかしら」の台詞は、2度3度繰り返し簡単なポーズ、振り付きで三者三様に発声しても面白いし、その役の全員が声を揃えてもよい。声にずれやばらつきがあっても面白いのではない。

図4「赤ずきん」舞台(複数の配役)



○ 異文並行読み、異文重層法

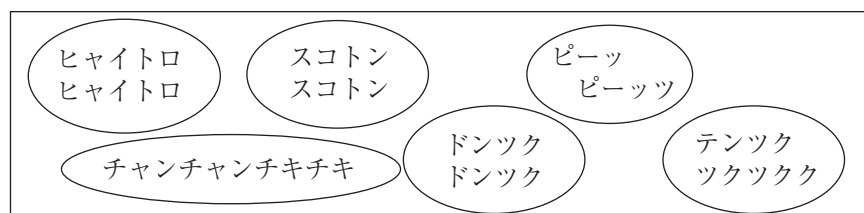
- | | | | | |
|---|------------|---------|-----------|---------|
| a | ハイトロハイトロ | ヒャラリーリー | ハイトロハイトロ | ヒャラリーリー |
| b | テンツクツク | テツクテン | テンテンテツク | テツクテン |
| c | チャンチャンチキチキ | チャンチキチ | チャンチキチキチキ | チャンチキチ |
| d | ドンドンドロツク | ドロツクドン | ドンツクドンツク | ドロツクドン |
| e | スコトンスコトン | デレツケデン | スットンドンドン | ドロツクドン |
| f | ピーッ | ピーッ | ピーッ | ピーッ |

a～f 6 人が一斉に、異なった音を発声するのが「異文並行読み」である。拍子を揃えれば、祭り囃子のように聞こえる。(講座で行ったのは) 応用の「異文重層法」という技法は、a が一回言った後に、a の 2 回目に合わせて b が 1 回目を始める、以下同様に 1 回ずつ遅れてテンポを合わせていき、f が 1 回言ったところで終了、たとえるなら大縄跳びに 1 人ずつ加わっていき、全員で 1

度回したらおしまいにするような読み方である。

幼児教育の場では、サランラップの芯にカラーテープを巻くなどして笛や太鼓のバチに見立てて踊り、お神輿を担ぐ役などを作って見せ場にするとよいのではないかな。また、笛なら笛のパートごとに発声して見せ場とすれば単純になり、無理の無い範囲で、音を重ねてはいいかな。

図 5 「祭り囃子」の舞台



(講座では、この他「ソロ・アンサンブル・コーラス」の実践(西条八十「地引綱」の詩、「おむすびころりん」の脚本)と、「おおきなかぶ」の脚本、2 人読みの例として織田道代「へんてこ動物園」、まど・みちお「がいらいごじてん」、阪田寛夫「アンケート II おかあさんを何とよびますか?」「わかれのことば」を、また、組み合わせの応用として「カブとゴボウ」を紹介したが、ここでは割愛する。)

3. まとめ 講座担当者の感想

群読技法のうち何と言っても人の心を惹きつける「花」は、ソロ・アンサンブル・コーラスの実践です。今回も参加者一同真剣そのもので取り組み、最後まで読み切れたときには、誰からともなく拍手が起こり、全員笑顔満開になりました。

しかし、幼児教育の場の実践には、ソロ・アンサンブル・コーラスの技法は難しいものと推測します。ただ、先に挙げた「異文並行読み」技法で、祭り囃子の笛や太鼓の音を声で表現するのは、ゆっくりしたテンポならば比較的容易で、幼児にも可能だと思います。声を出すのは健康によいため、高齢者の施設でも群読は取り入れられつつあると聞いています。2002 年発足の日本群読教育の会では、実践報告を募っていますが、これをきっかけに、参加された先生方お一人おひとりが幼児向けに改良を重ね、現場でも活用されるならば幸いです。皆様のご協力のおかげで、講座も何とか形になりました。有難うございました。

《参考図書》

- * 日本群読教育の会 群読実践シリーズ
「すぐ使える群読の技法」(高文研)
- * はせみつこ編・飯野和好 絵
「みえる詩あそぶ詩きこえる詩」(富山房)
- * たかぎあきこ うた・やまわきゆりこ え
「たべものうた」
- * 阪田寛夫 作・太田大八 絵
「ぼんこつマーチ」
- * 岡田純也 編著・木村光江 作
「劇遊び脚本集」(ひかりのくに)
- * トルストイ再話・内田莉莎子 訳 佐藤忠良 絵
「おおきなかぶ」(福音館書店)
- * 角野栄子 作・スズキコージ 絵
「なぞなぞあそびうた」(のら書店)